



Title	事物の本質と定義：スピノザ『エチカ』における事物の本質に関する一問題について
Author(s)	小竹, 陽介
Citation	メタフュシカ. 2013, 44, p. 43-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26534
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

事物の本質と定義

—スピノザ『エチカ』における事物の本質に関する一問題について

小竹陽介

はじめに

スピノザは主著『エチカ』において、種や類、ならび普遍といった概念を批判し、そのようなものが実在を示さない、表象の産物であると考えている。また彼は、プラトンやアリストテレス以来の伝統的な種の本質のごとき概念を誤ったものであるとし、あくまで事物の本質を、その事物自体に固有のものとして理解している。ところがその一方で彼は、複数の事物がある共通の本質を有しているかのような記述をしてもいる。

本稿の目的は、スピノザにおける本質概念の検討を通して、このような一見矛盾しているかのような本質についての記述を、整合的に理解することにある。

本稿は次のようにして進められる。まず第一に、スピノザが種の本質について一見矛盾した考えを持っているものと思われることの根拠となるテキストの箇所を挙げる（第一節）。次に、この問題についての解決法のうち最も有力な、朝倉友海の解釈を紹介し、その問題点を指摘する（第二節）。次に、新しい解釈を提示するために、形相的本質と現実的本質という二つの概念について検討する（第三節）。そして最後に、スピノザにおける定義概念を事物の本質と結びつけることによって、上記の問題の解決を試みる（第四節）。

第一節 問題の背景

『エチカ』第2部定理40備考1では、人間一般とか犬一般のような普遍概念が、表象の産物だとして批判している。この点について、スピノザの批判的態度は全著作において一貫しているといってよい。同じ備考において彼は、いかにして人間精神が普遍概念を形成するかを説明している。それによれば、人間身体は有限であるがゆえに、一度に一定数の表象像しか形成できない。それを超えた表象像を形成した場合、精神はそれぞれの表象像が有する差異を判明に認識することができず、表象像は混乱してしまうという。このような複数の表象像の混乱が複数事物に共通

の像としての普遍概念の形成を招くことになる。そうして形成された普遍概念は、各人の身体の状態や外的条件などによって異なる内容を持っている。人間、犬といった事物の定義について意見の相違が起こるのは、そのことが原因であるという。

「たとえば、よりしばしば人間の姿を驚嘆しながら観想するものは、人間という名辞を直立した姿の動物と理解するであろう。だが、別の仕方で人間を観想することに慣れた者は、人間に関して他の共通の像を形成するであろう。すなわち、人間は笑う動物、羽の無い二本足の動物、理性的な動物であるなどと想像するであろう。かくして他の事柄についても、各人はその身体の状態に応じて、ものの普遍的な像を形成するであろう。それゆえ、自然物をものの単なる像によって説明しようとした哲学者達の間で、あれだけ多くの論争が生じてきたことは驚くに足りないのである」(E2P40S1)

総じて、スピノザにとって普遍や種・類といった概念は、人間精神が混乱した表象によって作り出す誤った観念であり、実在を示さないものであるといえる¹。

そうすると、スピノザは種の本質のような、複数の事物に共通な本質、つまり種の本質のようなものを同時に否定しなければならないようにも思われる。事実、スピノザは本質という概念について、次のような定義をしている。

「それが与えられればある事物が必然的に定立され、それが除去されればそのある事物が必然的に滅びるようなもの、あるいはそれがなければある事物が有ること考えられることもできないようなものを、その事物の本質に属すると私は言う」(E2D2)

このように事物の本質は、その対象となる事物の存在と相互依存的なものとされている。そうになると事物の本質とは複数の事物に共通ではありえず、どこまでも個別的な本質であるということになるだろう。

ところが、彼は『エチカ』の複数個所において、種の本質を認めているかのような記述をしている。たとえば『エチカ』第1部定理8備考2では、

「定義は定義された事物の本性のほかは何ものも表現しないのだから、いかなる定義もある一定数の個体を含まずまた表現しない。例えば三角形の定義は三角形の端的な本質のみを表現し、決してある一定数の三角形を表現しない」(E1P8S2)

と言われている。さらに、ここで言われる「個体」をスピノザは、「一つの類に属する個物」というように定義している。つまりスピノザはここで類概念を認めてしまっていることになる。さ

¹ Cf.TIE99. また『短論文』第1部第6章では、神が個別者を認識するか、それとも普遍者のみを認識するかという中世以来の論争に関して、前者の立場を表明している。

らに彼は第1部定理17備考2において、

「人間は本質に関しては完全に一致しうが、存在においては異なるのでなければならない。したがって一人の人間の存在が減びたとしても、他の人間の存在が減びるということはないだろう。しかしもし一人の人間の本質が破壊されて虚偽になるということがありうるとしたら、他の人間の本質も破壊されるだろう」(E1P17S)

と言っているのである。これらのテキストにおいて彼が、人間をはじめ諸事物がなんらかの種類に属し、また同じ種類に属する複数の諸事物と本質を共有しているものと考えていることは明らかである。しかし、このことは上述の第2部定義2と矛盾するようにも思われる。このようにして、スピノザにおける本質概念が、個別的なのか種的なのかといった問題が生じる²。

第二節 朝倉による解釈

この問題を解決するために朝倉は、『エチカ』第1部において種的なものとして扱われる「本質」という語が、第2部定義2において定義されるような本質概念とは異なり、むしろ共通概念を意味するものと主張している³。彼によると、スピノザは自己の本質概念の特異性を自覚しており、『エチカ』第1部では伝統的な意味において「本質」という語を使用していたという。そして第1部においてすでに「本質」という語を使用していたにもかかわらず、第2部においてようやく「本質」という語を定義したのは、この部から「本質」という語を自己自身の概念として取り扱いはじめるとすることを意味している、というのである。

しかし共通概念は、アリストテレス的伝統に則った意味における本質たりうるだろうか。一般的に種の本質といえば、動物・植物とか人間・犬といったものを想起するものであろう。しかしスピノザは共通概念の例として、延長や運動・静止といった概念を挙げている(E2P37)。これら概念をもって伝統的な種の本質と呼ぶことには、多くの人が違和感を覚えるであろう。

そもそも本質を定義するにあたってスピノザが意識しているのは、伝統的な種の本質としての本質概念ではない。というのも、スピノザは『エチカ』第2部定理10備考において、神が万物の原因であることを指摘したうえで、そのことこそが、彼が「ある事物の本質には、それがなければそのある事物が存在することも考えられることもできないものが属する」と言わなかったことの理由であると言っている。もし本質をこのように定義すれば、神が万物の本質に属すると言わざるをえなくなってしまう、というのである⁴。彼が本質概念について語るときに批判するのは、神を万物の本質とみなさざるをえなくなるような本質定義であって、アリストテレス的伝統にお

² たとえばゲルーは、スピノザにおける本質概念が普遍的な種の本質であると主張している(Gueroult [1974] pp.459-463)。

³ 朝倉[2012]pp.217-231。

⁴ これと同じことが『短論文』第1部第10章においても言われている。「…また彼らが根本規則とみなしていること、つまり「それがなければある事物が存在することも理解されることもできないものがそのある事物の本性に属する」ということをわれわれは認めない」(KV1.10)

けるような種の本質ではない。

第三節 現実的本質と形相的本質

新しい解決法を提示するために、まず事物の本質にかかわる二つの概念、つまり現実的本質 *essentia actualis* と形相的本質 *essentia formalis* について検討したい。

スピノザは「それによってあらゆる事物が自己の有ることに固執しようと努める努力」(E3P7)を、事物の現実的本質と規定している。事物が存在しないと事物は存在に固執しようがないのだから、この努力は事物の現実的存在と相互依存関係にあると考えられる (E2D2)。つまり現実的本質は事物が存在する限りにおける本質である。

そうすると事物の本質は、事物の現実的な存在が終了するとともに消滅してしまうようにも思われよう。ところが、スピノザは『エチカ』第2部定理8において、「存在しない個物ないし様態の観念は、個物ないし様態の形相的本質が神の諸属性の中に含まれている」と言っている。つまり事物の本質は、事物の非存在にもかかわらず、神の諸属性の中に含まれている限りにおいて存在しなければならないのである。

一見すると、このことは『エチカ』第2部定義2に矛盾するものと見えなくもない。しかし、第3部定理7における現実的本質の規定は、その証明において「それによってあらゆる事物が自己の有ることに固執しようと努める努力は、その事物の与えられた本質、あるいは現実的本質 *ipsius rei datam, sive actualem essentiam* にほかならない」(E3P7Dem) とも言いかえられている。ここで付け加えられた「与えられた *data*」という語は、決して無意味なものではない。個物の「与えられた」本質とは、いったい何に与えられているのか？もちろん、個物に与えられているのである。そしてすでに見たように、本質とは、「それが与えられればある事物が必然的に定立され、それが除去されればそのある事物が必然的に滅びるようなもの、あるいはそれがなければある事物が有ることも考えられることもできないようなもの」(E2D2)であった。ここで、本質が「与えられ」「除去される」ものであると言われていることに注意しなければならない。事物の本質は、事物に与えられることによって「現実的本質」と呼ばれる。この本質が除去されると同時に事物は消滅するが、それでも本質それ自体は「形相的本質」として神の属性の中に含まれる限りにおいて存在することになる (E2P8C)。

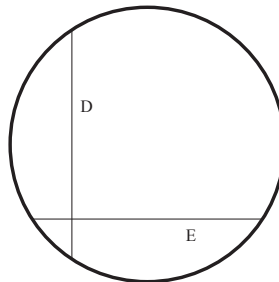
この「現実的本質」「形相的本質」という区別についてより深く考察する必要がある。事物の存在・非存在は、その事物の本質とどのように関わっているのだろうか。個物の本質は、個物の存在を含まず、それゆえ個物の存在の原因たりえない。だから、存在する個物を存在しないものとも考えることもできるし、反対に存在しない個物を存在するものとして考えることもできる (Ep12, E1P8S2)。それにもかかわらず、個物の存在・非存在によって個物の本質が二通りに呼ばれうるのは、現実的本質が、事物が自己の有に固執するための、つまり存在し続けるための力能だからである。それゆえ現実的本質は、個物の持続的存在と密接に関わっているといえる。

では、存在しない事物の形相的本質は、どのような仕方て神の本質に含まれているのだろうか。事物が存在しないと事物は存在に固執しようがないのだから、存在しない事物の本質は、事物を

「有ることに固執しようと努め」させるようなものではなくなるはずである。だからといって形相的本質は、たんに事物の存在可能性を示すようなものではない。『エチカ』第4部序文において、スピノザは「いかなる事物も、より完全であろうと不完全であろうと、それが存在し始めたときと同一の力をもって常に存在に固執することができるだろう」と言っている。このことは、存在に固執するための力が、常に外的状況によって強くなったり弱くなったりする事物の側にあるのではなく、むしろ事物の本質の側にあることを意味している。たとえ事物が存在することをやめたとしても、その事物の本質は、たしかにその事物を存在へと固執せしめることをやめるのにはあるが、事物を存在へと固執せしめるための力それ自体は保存していなければならない。つまり、形相的本質は、現実的本質が持っている力を保存しているのである。

ところで、存在しない事物の形相的本質について、スピノザは次のような例を示している。

「円は、その中で互いに交わるすべての直線の線分からなる長方形が相互に等しいような本性を有する。ゆえに円の中には、相互に等しい無限に多くの長方形が含まれていることになる。しかしこういう長方形はいずれも、円の存在する限りにおいてでなくては存在すると言われえない。同様にまたこれらの長方形の観念はいずれも、円の観念の中に包含される限りにおいてでなくては存在すると言われえない。今、かの無限に多くの長方形の中でただ二つだけ、つまりEとDの線分からなる長方形だけが存在すると仮定しよう。そうすれば確かに、それらの長方形の諸観念もまた、単に円の観念の中に包含されている限りにおいて存在するだけでなく、さらにまたそれらの長方形の存在を含む限りにおいても存在する。そしてこれによってそれらの長方形の観念は、他の長方形の観念と区別されるのである」(E2P8CS)



スピノザによる図

このスピノザによる例をどのように理解するべきだろうか⁵。円が神の例えであるということは明らかである。しかし、個物を何に例えているのか。二直線によって形成される二つの長方形のペアを一つの個物ととらえ、このような無限に多くの二直線の組み合わせが円に含まれているものと理解すべきだろうか。しかし、仮にそうだとしたら、直線 E と D によって形成される二つの長方形もまた、一つの個物を形成するものとみなされなければならないはずである。ところがスピノザは、「長方形 E、D が存在する」と同様に「それらの長方形の諸観念 eorum ideae が…存在する existunt」というように、E と D によって形成される二つの長方形の観念を複数形で呼んでいる。仮に長方形のペアが一つの個物を成しているならば、このペアに対応する観念は一つであるはずである。その場合「それらの長方形の観念 eorum idea」というように、観念は単数形で呼ばなければならないだろう。そのようにはなっていない以上、長方形一つ一つに対して、対応する一つの観念が存在することになる。それゆえスピノザが、直線 E による長方形と D による長方形を、互いに独立した個物として考えていることは明らかである。つまり彼は、円の中で交差する複数の直線によって形成される無限に多くの長方形の一つ一つを個物に見立てているのである。

以上をふまえた上で、このテキストならび例について指摘したい点は二つある。

まず一つには、円の中の長方形は、二直線の交点と円の中心との距離によって面積が変化する。つまり円の中には、相互に異なる面積をもつ、無限に多くの面積の等しい長方形のグループが、無限に多く含まれていることになる。しかしスピノザは、円の中に相互に等しい面積を持つ無限に多くの長方形について語っているだけであり、他の面積の長方形については言及していない。しかし、これについては後に詳しく述べることにする。

今は先にもう一つの点を指摘し、それについて論じたい。それは、スピノザがこのテキストにおいて長方形の現実的な存在が長方形の区別可能性を保証しているということである。存在する事物の本質は、その事物の存在ゆえに、他の事物の本質から区別される。このような区別の有無が、現実的本質と形相的本質の違いとして挙げられうることになる。

そうすると、存在しない事物は個性を持たないということになるようにも思われよう。実際、一部の解釈者は、存在しない事物に区別可能性を認めないだけでなく、そこから直接的に、存在

⁵ この例は、ユークリッド『原論』第三巻定理三五「方べきの定理」を念頭においているものとされる（黒川[2013] p.114）。その定理とは、「もし円において二つの弦が互いに交わるならば、一方の弦の二つの部分にかこまれた矩形は他方の弦の二つの部分にかこまれた矩形に等しい」（中村[2011]p.75）というものである。たとえば、直線 AB と直線 CD が円の中で交わる時、二直線の交点を P とすると、 $AP \cdot BP$ の積による四角形の面積と $CP \cdot DP$ の積による四角形の面積は常に等しい（図 1）。

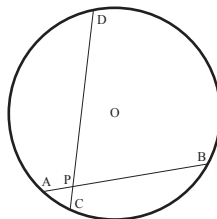


図 1

しない事物が個性をもたないという結論を引き出している⁶。また『神・人間およびその幸福についての短論文』（以下『短論文』と略記）では、明らかに、存在しない個物の本質には個性がないと言われている⁷。

しかし『エチカ』第2部定理8備考の記述を注意して読んでみると、どうも事情は異なっているように思われる。『短論文』において、スピノザは事物どうしの区別可能性と事物の個性を同一視し、存在しない事物が区別不可能であるということから直接、存在しない事物の個性を否定していた。他方、『エチカ』第2部定理8備考においては、事物の現実的存在が他の事物との区別を与えることが言われてはいるが、個性については明言を避けているかのようである。また、第2部定理8備考における図形の例においては、無限に多くの存在しない長方形が、円の中に含まれているものとされていた。区別可能性と個性を同一視したうえで、この例を事物と神の本質に適用するならば、個性を持たない「無限に多くの」諸事物が、神の本質の中に含まれているということになる。しかし、個性を全く持たない事物の本質が、「無限に多く」という仕方でも存在するというのもおかしい話であろう。

そこでドゥルーズは、スピノザの中に内在的区別・外在的区別という二種類の区別概念を見出そうとする⁸。確かに、事物は持続的な存在によって相互に区別される。しかしそれは外在的区別に過ぎず、そのような区別を可能にするような、より基礎的な区別がある。というのも、スピノザにおいて本質はそれ自体、事物の存在とは別個の存在を与えられている。この存在とは属性が存在する限りにおける存在であり、属性自身の存在と区別されない。しかしスピノザにおける本質とは可能的な概念ではなく力能であり、強度である。それゆえこの本質に内在する強度量によって、諸本質は相互に量的に区別される。このような量的区別が、本質の持つ内在的区別に他ならない。

仮にドゥルーズの解釈が正しければ、一見不可解な『エチカ』第2部定理8備考のテキストも整合的に理解することができる。先ほど指摘した通り、第2部定理8備考では、『短論文』でなされていたはずの、事物の持続的存在が与える区別可能性と個性との同一性の主張が失われており、この区別可能性と個性との関係はあいまいなものとなっている。

スピノザが『短論文』において表明した自らの立場を『エチカ』において部分的に変えたものと考えれば、このことの説明がつくだろう。つまり『エチカ』においては、事物が存在しない間も、事物の本質は自らのうちに持っている力能によって、他の様態の本質と内在的に区別されるのである。

第四節 定義されるものと定義

これまでの議論をまとめてみよう。現実的本質と形相的本質は、与えられた本質・除去された

⁶ 柏葉[2010]p.45, Nadler[2002]p.242.

⁷ たとえば『短論文』付録2や、第2部20章の注8などが挙げられる。

⁸ Deleuze [1968] p.178. ドゥルーズは『短論文』の時点でそのような二種類の区別概念が存在すると主張している。しかし『短論文』においては事物の存在がもたらす区別と個性の同一性を明言している以上、そのような主張は行き過ぎであろう。

本質として区別され、『エチカ』第2部定義2と整合する。事物の形相的本質は内在的に区別され、それによって個別性が保存されている。つまり形相的本質も現実的本質同様、その対象となる事物の個性を保証するものであって、個別的本質であることに変わりはない。

ところで『エチカ』第1部定理17備考2では、「仮に本質が破壊されたとすれば」、そのときは同じ本質の全てのものが消滅するであろうと言われていた。もちろんこれは反事実的な仮想であり、スピノザは、事物の本質が破壊されることなど現実にはありえないものと考えている。

とはいうものの、この反事実的仮定の重大性には変わりがない。このようなことが例え起こりえないにせよ考えられうるというのは、人間たちが同じ種の本質を共有しているか、また人間たちの個別的本質同士が、なんらかの相互依存関係にあるとしか考えられない。

ここで、『エチカ』第2部定理8備考の円について指摘した一つの点を思い出そう。円の中には面積の等しい無数の長方形が存在すると言われていた。この長方形の面積は、二直線の交点と円の中心の間の距離によって変化する。ところがスピノザは、第2部定理8備考において、同じ面積の長方形についてのみ語っており、異なる面積の長方形については触れていなかった。しかし、彼がこのことについて無知であったとは考えられない。我々はそこで、スピノザが、等しい面積の長方形をある意味ひとつの「まとまり」として考えていて、他の面積を持つ長方形とは区別しているものとする。つまり、無限に多くの等しい面積の長方形が、その一つの「まとまり」のうちに含まれる、ある諸事物の例えとなっているものとする。

しかしそうすると、ここでいう「まとまり」がどのようなものであるかが問題となるだろう。スピノザは普遍者や類・種概念を、人間精神の外に実在しない、いわば虚構的な概念と考えていたはずである。そうすると、神のうちには個別者しか存在せず、個別者をいくつかのグループにふるいわけような原理は存在しえないように思われよう。

ところが、スピノザは『知性改善論』（以下『改善論』と略記）において、そのような原理となる概念について語っているのである。それは、「確固永遠なる事物 *res fixae et aeternae*」である。スピノザによると、この現実世界において生成変化する個物の因果系列を把握することは、人間精神にとって不可能である（TIE100）。しかし、そのような因果系列を理解することは必要ではない。なぜなら、「変化する個物の本質はその系列すなわち存在する秩序からは引き出されない」（TIE101）からである。現実における個物の本質は確固永遠なる事物の中にある法則に依存する。

「これら確固永遠なる事物は、たしかに個別者ではあるものの、その偏在性と極めて広範な能力とのゆえに *ob eorum ubique praesentiam ac laetissimam potentiam*、我々にとってあたかも *tanquam* 普遍者、あるいは変化する個物を定義するための類であり、一切の事物の最近原因である」（TIE101）

この「あたかも *tanquam*」というのも非常に微妙な表現である。スピノザがここで、非常に慎重な態度で文章を書いていることがわかるだろう。「我々にとって」というのは、「変化する個物」、つまり人間をはじめ、現実存在する諸事物のことと理解できる。この確固永遠なる事物は、

確かに個別者であり、普遍概念のようなものではない。しかし、それでもこの事物は、我々のような変化する事物を定義する、「あたかも」普遍者や種のようなものとしてふるまうのである。つまり現実に存在しうる事物と永遠確固たる事物は、どちらも個別者であるにもかかわらず、個と普遍のような関係にある。

これら諸事物が、種や類のように複数の諸事物を定義するものとして考えられるのは、その「偏在性ときわめて広範な力能」のゆえであるという。しかし、この「偏在性ときわめて広範な力能」とは何を意味するものなのか。『改善論』においては、その答えを知ることは難しいように思われる。しかし少なくとも、確固永遠なる諸事物が変化する諸事物を定義するものとして看做されうるのは明かである。すでに見たように、定義について『エチカ』第2部定理8備考では「いかなる定義もある一定数の個体を含まずまた表現しない」と言っていた。一方『改善論』では、次のように言っている。

「知性は事物を持続のもとによりも、むしろある永遠の相のもとに、および無限数のもとに知覚する。あるいはむしろ、事物を知覚するのに、数をも持続をも考慮に入れない」(TIE108)

ここで、事物を「無限数のもとに」認識することを、「数を考慮に入れ」ることなく認識することと等置していることに注意したい。なぜこのようなことが可能なのか。このことは、『改善論』における「確固永遠なる諸事物」を、『エチカ』第2部定理8備考に適用されることによって、より理解しやすいものとなる。先に我々は、無限に多くの等しい面積の長方形が、ある一つの「まとまり」のうちに含まれる、ある諸事物の例えとなっていると主張した。ここで我々は、この「まとまり」が事物の定義であり、また『改善論』における「確固永遠なる諸事物」に相応するものとする。つまり、確固永遠なる事物＝定義は、それによって定義される無限に多くの諸事物を含むことによって、それら諸事物に対して、あたかも変化する個別者に対して普遍や類・種概念のようなものとして看做されうるのである。

事物を「無限数のもとに」認識することが「数を考慮に入れ」ることなく認識することと同義であることも、これによって理解できる。というのも、定義される諸事物の本質を表現する定義のもとでそれら諸事物を考察することは、定義に含まれる無限に多くの諸事物を考察することと同じことだからである。

ここで、永遠確固なる諸事物の「偏在性ときわめて広範な力能」が何であるのか、答えを出すことができるだろう。すなわち、永遠確固なる諸事物が、定義されるところの諸事物の本質を含んでいるという事実、これこそが、「偏在性ときわめて広範な力能」にほかならない。

さらにまたここで、本節の冒頭に提示した問題に答えることができるだろう。『エチカ』第1部定理17備考2では、ある人間の本质が破壊されえた場合、そのとき他の人間の本质もまた破壊されなければならないと言われていた。このようなことが生じうるのは、定義される諸事物の本质と定義が部分と全体の関係にあり、それゆえ相互依存関係にあるからである。『エチカ』第2部定理24証明では、身体の諸部分が身体の本質に属すると言われていた。つまりスピノザは、

部分は全体なしに存在せず、全体もまた部分なしに存在しないと考えている。それゆえ、定義される諸事物と定義が部分と全体の関係にあるとすれば、両者は相互依存関係にあると言われることになるのである。そうすると、ある人間の本質が破壊されたとすれば、それと同時に、人間の定義もまた破壊されなければならない。このとき、人間の定義とともに、あらゆる人間の本質が同時に破壊されるということは必然だろう。

結論

このようにして、『エチカ』第1部における本質概念が、第2部以降における本質概念と矛盾ないし対立するものではないことを示すことができたと思う。すなわち、事物の定義は、それによって定義されることの無限に多くの諸事物の本質を含んでいる。定義と定義されるものは相互依存関係にあり、一方が他方なしにはあることも考えられることもできない。『エチカ』第1部において事物の本質が種の本質であるかのように思われたのは、事物の本質が定義との関連において語られていたからであると考えれば説明がつくだろう。

それにしてもなぜ、スピノザは定義という、一見普遍的と見える概念を保存しなければならないか。その理由は、スピノザの幾何学的な思考方法に求められる。スピノザは、事物の真なる認識のためには、その事物の定義から出発しなければならないと考えている（TIE94, 95）。つまり、三角形の定義から三角形の様々な性質を引き出していくような仕方で、諸事物を認識しなければならないということだ。このとき、定義のもとで事物を認識する仕方を、単なる精神の産物としてではなく、同時に実在についての真の認識として保存するには、個別具体例としての事物を内包するようなものとしての事物の定義が必要とされたのではないだろうか。

（こたけようすけ 哲学哲学史・博士後期課程）

凡例

- ・『エチカ』をE、『知性改善論』をTIE、『神、人間およびその幸福についての短論文』をKV、書簡をEpとそれぞれ略記する。スピノザのテキストはゲプハルト版（Gebhardt, Carl(ed.) [1925], Spinoza opera, (Heidelberg: Carl Winter))を使用。
- ・引用に際して、『エチカ』では以下のように省略している。
E1, 2 etc. = 『エチカ』第一部、第二部等、Prae = 序文、D = 定義、P = 定理、Dem = 証明、C = 系、S = 注解、Ax = 公理、Post = 公準、L = 補助定理、Ex = 説明、Append = 付録
- ・『知性改善論』についてはブルーダー版による節番号を記す。
- ・『神、人間およびその幸福についての短論文』については、部と章番号を順番に記す（KV1.2 = 第1部2章）。
- ・書簡はEpと略記し、ゲプハルト版の続き番号を付す。
- ・邦訳は岩波の畠中訳を参照した。

参考文献

- ・ Deleuze, G. [1968] *Spinoza et le problème de l'expression* (Paris: Minuit)
- ・ Garrett, D. [2009a] "Spinoza on the Essence of the Body and the Part of the Mind That Is Eternal," in *A Companion to Spinoza's Ethics*, edited by Olli Koistinen (Cambridge: Cambridge University Press): 284-302
- ・ ——— [2009b] "Spinoza's Theory of ScientiaIntuitiva," *Scientia in Early Modern Philosophy*, edited by Tom Sorrell, G.A.J. Rogers, and Jill Kraye (Springer): 99-116
- ・ Gueroult, M. [1974] *Spinoza II: L'âme* (Hildesheim: Olms)
- ・ Nadler, S. [2002] "Eternity and Immortality in Spinoza's Ethics," in *Midwest Studies In Philosophy*, 26, Issue 1: 224-244.
- ・ 朝倉友海[2012]「概念と個別性 スピノザ哲学研究」東信堂
- ・ 黒川勲[2013]『スピノザにおける「存在しない個物」に関する定理』「大分大学教育福祉科学部研究紀要」第35巻、第2号別刷、大分大学教育福祉科学部：109-120
- ・ 四竈正夫[1984]『スピノザにおける様態の永遠な本質とその観念について』筑波大学「哲学・思想論叢」02号：13-24
- ・ 田中敏彦[1989]『個体論(I)——スピノザ個体様態観について——』「神戸外大論叢」第40巻、第2号、神戸市外国語大学研究会：1-33.
- ・ 中村幸四郎ら訳[2011]「ユークリッド原論・追補版」共立出版

The Essences and the Definitions of Things

—A Problem of Essences in Spinoza

Yosuke KOTAKE

In this paper, I attempt to solve the problem of the essences of things in Spinoza's Ethics. This problem concerns that whether the essences of things are universal or particular.

First, I explain the backbone of this problem. According to Spinoza, universals, genus and species are products of the imagination, and not real. Therefore, the essences of things are considered particular. Sometimes, however, when Spinoza speaks of the essences of things, it appears that he thinks of essences to be universal (Section 1).

Second, I introduce and examine Asakura's interpretation. Although he claims that it is only in the first book of Ethics that Spinoza discusses "common notions", that is, the properties common to plural things in terms of "essences", I demonstrate that Spinoza uses the word "essences" in the same meaning throughout the whole of Ethics (Section 2).

Third, I identify Spinoza's distinction between two concepts of essences, that is, formal essences and actual essences. The former are the essences of non-existent things, and the latter are those of existent things. Some commentators view the formal essences not to be individual, but I demonstrate why this is incorrect (Section 3).

Finally, I claim that a relation between the essences of things and the definitions of things is that of the relation between the part and the whole as essences are particular, and definitions are universal. By doing so I present a solution to the above stated problem (Section 4).

「キーワード」

本質、個別性、区別可能性、定義